

開けてびつくり物語

金子彦二郎

一

「正直爺さん ポチ連れて

うらの畑を掘つたれば

大判小判が

おあくおくおつくおく。

意地悪爺さん ポチ借りて

うらの畑を掘つたれば

瓦や瀬戸かけ

があら／＼があらがら。」

これはむかし／＼其の昔、其のまた昔の大昔の話であります、これと丁度同じことが、現にこの昭和のめでたい大御前もあつて、私どもがぢ

かに其の話をきき、其の寶物の寫真も見られるといふのは何といふ面白いこととせう。

二

昭和の正直爺さんは淺見龜吉といふ人で、あの秩父嵐に名高い埼玉縣秩父郡蘆ヶ久保村に住んでゐた織物の行商でありました。

子供の時から、まるで神様のやうな正直なさうしてすなほな心の持主でありまして、父母や先生のおいひつけに背いたことは一度もなく、お友達と言ひ争つたこともないといふ善人でした。そしてまた大層情ぶかい人で、どうかすると世間の子供たちは、學校通ひの道すがらなどに、用もないのに路傍の草や木の芽や枝を手當り次第折りむし

つたり、それから又鶏なり犬なり、或は餘所の村の子供なり、見つけ次第に石を投げつけたり、悪口を言つたり、いぢめたりしたがるものですが、

この子供時代の龜吉さんに限つて、決してそんな無茶なわるふざげや亂暴などは致しませんでした。いや自分がしない許りてなく、お友達がさういふことをしようとすると、きつとやさしく諫めて止させる役をつとめるのでした。そんな風ですから、自分はもとより、決して生き物をいぢめたり他村の子供に犬をけしかけて吠えさせたりしないばかりか、盲目滅法な蚯蚓が道の真中へても匍ひ出してゐるのを見つけようものなら、皆はわざ／＼下駄で踏みつけたり、唾をかけたりにして行き過ぎるのに、この龜吉さんだけは、きつと「あゝ、そんな處にゐると、車の轍や馬の蹄にかゝつて殺されてしまふよ。」といったはるやうに言ひきかせながら、側の叢の中へ送りこんでやるのでし

た。それで誰いふとなく、みんなこの龜吉さんのことを佛龜吉々々々と言つて居ました。

三

龜吉さんは大人になつてからは、親ゆづりの秩父銘仙の行商を承けついで、一年の三分の二は、親の代からの御得意さきである中國筋から九州方面へ出かせぎにまゐりました。もつて生れた正直と情ぶかい心とが、そのお得意さきでもすつかり認められましたので、「龜吉さんの銘仙は品がよくて丈があつてさうして値段も安い。」といふ大變な信用を博しました。ほんとに「正直は最善の商略」であります。そんな風ですから、中國筋や九州方面のお得意先では、すぐ近所の町の呉服屋にも同じやうな品がいくらも積んであり、又同じ銘仙の行商も幾人となく廻つては來ますが、「もうやがて安心して買へる龜吉さんが廻つて來る時分だから。」と言つて、他からは買はずに待つてゐてくれ

るといふ有様でした。そんな頃にかさね高らかな荷を背負つて汗を拭き〜来る龜吉さんの小さな姿を村端れなどに見つけますと、懐かしい親戚の者の歸郷でも歓迎するかのやうに、村人達は小手をかざし足をつまだて〜待ちうけてくれるのでした。

「どつこいしょ。」

といつてお玄關に荷をおろすと、「やあ、御苦勞々々々。」と言つて、お茶を入れてくれたり、國の妻子は無事でゐるか。「など、優しい言著をかけてくれたりするのでした。するときつと、柔和に小腰をかどめた龜吉さんは、改まつて

「まづ〜、皆さま御機嫌さんで。又お品のよい新柄も澤山持參致しましたから、どうぞ相變らず御引立をお願ひ申します。お蔭業で國許では皆々無事息災で過して居ります。へえ。」

ときまつたやうに挨拶して、お得意様達の好意に報いるのでした。

こんな風で澤山仕入れて來た秩父銘仙は、ずん／＼はけていつて、時には品不足をさへ告げるこ
とがありました。

四

龜吉さんのうちはもと〜村での舊家である上に、何でも先々代の頃には随分手廣く商買をやつて居り、それに物數奇から、いろ／＼と珍らしい品を、どつさり買込んで土藏の中にしまつてあるといふ噂でありました。龜吉さんはそれを亡くなつたお父さんからすつかり聞いても居つたし、其の在りかもよく見知つて居ましたが、とにかく感心な心掛な人なので、先祖や親達の遺してくれた財産を當てにして頼つてゐるやうでは、男と生れた意氣地がないと思つてゐましたので、一切それらには手も觸れず、たゞ〜正直と勤勉とを資本にして前に述べたやうに仕事に勵みましたので、涼しい秋風が吹く頃にはたんまりとお金を儲けて

は、いそ／＼と妻や子が頸を長くして待ちこがれてゐる故郷秩父の山本へ歸つて來ました。

お父さんのお歸りといふと、妻のおりうさんはじめ、長女のおとよさん、次女のつるよさん、三女のはなえさん、それから一番年下の長男の京三さんの五人の喜びは大したものでした。かうして佛のやうなお父さんを中心に、素直に穩かに生ひたつた四人の子供たちは、世間の不景氣も知らずに何不足ない楽しいお正月を幾度か迎へ送りしてゐました。

しかし人の世ほど分らないものはありません。こんな楽しい家庭にも、思ひがけない黒い冷たい嵐が吹き込んで來たのです。といへば大がいお察しが出来ませうが、大事な／＼働き手のお父さんの龜吉さんが、ふと思ひついたのであります。本人も大したことはない。すぐ直ると言つてゐましたし、家の人達も病人の言葉をさいてどうやら落

着いてゐましたのに、急に容態がわるくなつて、あはれ佛龜吉さんは、昨年十二月二十八日、楽しいお正月の支度最中に驚き悲しむ妻や子の聲に取りかこまれつゝ、五十四歳を一期として、眠るが如くに此の世を去つてしまつたのであります。

五

天にも地にもかけがへのない大事な大黒柱を失つて、淺見一家の者達は萎れかへつてしまひました。家中でたゞ一人の男である長男の京三さんは今年やつと十三にしかありませんから、固よりまだお父さんに代つて商買に出られもしませんし、又出されもしません。といつて、折角お父さんの努力で賣り廣めたお得意先を失ふのも惜しいし、第一當分はよいとしても、いづれ暮しにも困つて來るのは知れきつたこと。さてどうしたらよからうと、佛壇の前に集るごとに、五人の親子の口からは長い大きな溜息が吐き出されました。

その歎きを見るに見かねて、お父さんの遺志をつぎ此の窮境にある一家を背負つて行かうといふ大決心をしたのが長女のおとよさんでした。いよ／＼お父さんの百ヶ日の法要も済み、毎年お父さんが中國筋から九州路へかけの旅路に出かける四月が來ますと、健氣なおとよさんは自分の決心の程をみんなに告げ、女の命にもかへ難い緑の黒髪を根元からふつつりと切つて、優しくも雄々しい決心のもとに、銘仙の間屋から四五十匹の銘仙を卸して貰ひ、しつかり荷造りをして、お父さんの控帳に書き記してあるお得意先を頼りに出掛けていつたのであります。さうして只今は九州の方へ廻つてゐるとの便りが來てゐます。

六

おとよさんの勇しい後姿を涙で見送つた弟と二人の妹とは、たゞぼんやり遊び暮してゐては亡くなつたお父さんや、又お姉さんにも相濟まぬとい

ふので、めい／＼自分の得手な仕事を勵んで、少しても暮しの手助をし、心細がつてゐるお母さんを慰めようといふので、朝から晩までせつせと立働いてゐました。

今日も今日とて、二人の姉妹はお母さんのお手傳をして、お父さんの存生中からも殆ど手を附けたことのない土藏の二階の大整理をしようといふので、きりつと襷がけになり、眞黒になつてがら／＼の類の整理や、古箱類の始末をしてゐました。すると二階の隅の方に眞黒に煤ばんだ舊式な長持が一つ頑張つてゐます。つるよさんとはなえさんが、

「この中に何があるの？」

とお母さんに尋ねましたが、前に申した通り、祖先の遺してくれた財産なんか頼るやうな意氣地ない氣を起してはならぬといふ堅い決心で立つた龜吉さんのことですから、そこに素晴らしい家寶が

秘藏してあるなどといふことは、まだ誰にも知らせてありませんでしたので、永年連れ添つたお母さんも固より知つてゐよう筈がありません。それ

「さあ、何が入つてゐるかね。お母さんもまだ見たことがないのよ。」

といふ頗る頼りない返事しか出来ませんでした。

「何だが、氣味が悪いわね。吉切雀の嘶の古葛籠のやうに、中から一つ目小僧や、お化にでも出られちゃ大變だわ。姉さん明けてごらんよ。」

かういふのは妹のはなえさんでした。

「いやよ、そんな怖いお話をきいちや、ますくゝ氣味が悪くなつて、開けようたつて開けられないことよ。あなたが開けてよ。」

姉のつるよさんは斯ういつて、容易に手を下さうとは致しません。

しばらく譲り會つてゐますので、たうとうたま

りかねてお母さんが、笑ひながら、

「二人ともいやなら、私が開けませうよ。其の代りどんないゝものが入つてゐても別けてはあげませんよ。」

と言ひました。二人は異口同意に

「えゝ、どうぞ、こんな朽ちかけた長持なんかはどうせ碌なものが入つて居やしないわよ。みんなお母様にあげますわ、鼠の糞も一緒に。」

とからかひ顔にかう言ひ放ちました。

何十年來開かずの長持の蓋は取り去られました。そこには細長いいや、四角いいや大小幾十の立派な桐函が行儀よく入れられてありました。

「あや、お母さん、これ内裡様の函ぢやない？」
妹のはなえさんが、今まで知らずにゐて桃の節句にも飾らせられなかつたことが口惜しいといつたやうに頓驚な聲を立てました。

「さうね、早く見ませうよ。」

と手を出したのは姉のつるよさんでした。

「どんないい物があつても欲しがつてはいけませんよ。約束通りみんな私のですから。」

とお母さんが、又笑ひながら口を添へました。

七

大小さまざまな桐函は明るい座敷に持ち運ばれて、それ／＼蓋をあけられました。それは姉と妹の推察を見ん事裏ぎつて内裡様でも五人嘶子でもありませんでしたが、どれもこれも、目の覚めるやうな、立派な、さうして由緒づきらしい骨董品の類でありました。

隣や近所の人々が寄つてたかつて目を丸くして驚いてゐました。中にいくらかかういふ物に目のある人が、如何にも感にうたれたやうに、

「こりや、大變な代物だ。」
と叫びました。

噂を聞き傳へだ其の道の目利きの秩父神社の園

田さんや東京の専門家がやつて来て鑑定中であるが、光琳の描た畫幅を初めとして、初代乾山が焼いた中皿六枚、名工柿右衛門の手に成つた小皿が六枚、木米の双幅、其の外、古刀劔などどれもこれも天下の珍品揃なので、此の頃の相場に見積つたら三十萬圓が所もあらうといふので、開けてびつくり寶の土藏と、行く末を案じて悲歎にくれてゐた親子のものは、これも有りがたい先祖代々のお恩であり、心掛のよかつた亡くなつたお父さんからの授かり物だと、手をとつ合つて涙を流して喜びつゝ、すぐ様御佛壇にお明りをあげてお禮參りを致しました。

一家の浮沈の瀬戸きはと、健氣な心をふりたてゝ遠い九州路の果に馴れぬ行商に苦勞してゐるおとよさんの所へも、早速お伽の國のお嘶にもありさうな此の嬉しい便りが届いたこととせうが、その時の喜びはまあどんなであつたてせう。

お話かはつて同じ埼玉縣大里郡の明戸村といふ所に、ことし分別盛りの四十八歳になる菅原某といふ男がありました。親の代までは近郷近在きつての大金持で、翁大盡々々と言ひはやされて敬はれて居たのですが、この人の代になると、お酒は飲む、わる遊びはする、少しのことにも怒つて喧嘩はする、訟訴は起す、あれやこれやで、さしも翁大盡とうたはれた大身代も何時の間にか使ひつくし、家屋敷まで人手に渡してしまふ始末、年取つた両親はこれを苦にしたがもとで五年前に亡くなり、妻も此の亂行に愛想をつかして三年前に家出してしまひ、たつた一人取残された彼は、自業自得とは言ひながら、すつかり尾羽打ちからして、食ふや食はずのみじめな姿で、買ひ手がなないので賣らうにも賣れかなつた先租傳來の破れ土藏の片隅に、糞虫のやうにぼろきれにくるまつて

やうく雨露を凌いでみました。

若い時から心掛が悪くて、碌なことを致しませんでしたので、こんなみじめな姿におちぶれても隣近所の人達はもとより、親の代まで親しく出入りしてゐた親類の人達さへ、誰一人顧みる者もなく、優しい言葉一つかけてくれるものもありません。しかし生來の我がまゝ者の事とて、結局小うるさくなくてよいくらゐに考へて、土藏の中に残つてゐる小道具類など目ぼしいものから一つ賣り二つ賣つては酒にかへて、さもししい氣ばらしをしてゐました。

九

今日もいつもの如く、居酒屋の縁臺でチビくやつてゐると、珍しい噂話が耳に入りました。

「どうだい、豪勢なもんぢやねえか。大金持のうちと來たら、疊の上を一度掃いても五兩や三兩の金が轉げ出すといふが、全くだなあ。」

「大判小判なんか今までは話にだけさいてゐたが隣村の長井の舊家の土藏を壊したら出たあの一萬兩の小判を見た時にや、あいらはほんとに目が潰れかけたぜ。あいらの先租達も毀れ土藏の一つも残してゐてくれたら、天井裏からどえらい寶物でも見つけ出してやらうと思ふんだが今更仕方がねえな。」

「さうよ。金瓶かねびんの一つも土臺石の下に埋めといてくると、今日けふび日の不景氣にも助かるんだがなあ。そりやさうと、今日の新聞を見たかい。」

「さや、まだ見ねえが、何かよい儲け口ででもありうかい。」

「あいらの方のことぢやねえが、ます／＼あいらも古土藏がほしくなつたよ。」

「どうしたこんだ。古土藏ばかり欲しがつて、鼠ぢやあんめえし。」

「いや、えれえもんだよ。こなひのだの長井村の

掘出し物は一萬兩だつたが、今度の土藏の中から出た寶物と來たら、あいら、耳をほじつてちと保養をさせとけ、三十萬兩が代物だといふぜ。」

「へえ、これ、法螺もいゝ加減にしねえか。小忌々し。」

「法螺ぢやねえよ、これ此の通りちやんと書いてあるんだよ。」

と言つて示した新聞記事が龜吉さんの遺族たちの大にこ／＼語のいくさりでありました。

一〇

この會話を何氣なく聞いてゐた菅原某の眼は、この時異様に輝きました。さうして何となく落ちつかない風にそは／＼してゐましたが、さつきの男が漸く読み終つて、「ふーむ」と大きな溜息と共にはうり出した件の新聞紙を引きさらふやうに手にとると、まるで吸ひ込まれるやうに目をさらし

てゐました。そこには、「開けてびつくり、土藏の中の珍品、零落した一家に夢の様な幸福が舞込んだ話。」と書いた大きな活字が、彼の目をとろかすやうに踊り上つてゐました。

息もつがず読み終へた彼は、何を思つたか、無けなしの金で急いで拂ひを済ますと、まるで逃げるやうに繩暖簾をくゞつて出て行きました。

x

それから二三日後の東京新聞に

「……一人取殘された菅原某は、先祖が作つて置いた破れ土藏の中に一人起き伏を續けてゐたが最近隣村長井村から、家を壊したら一萬圓程の小判が出たり、秩父からは祖先の殘した明けずの土藏の長持から、三十萬圓程の寶物が出たりしたといふ棚ぼた式の話に、彼は自分も其の手で一儲けして、うまい酒でも味はうと、二三日前から住んでゐた土藏の打壊しにかゝり、二十

八日(昭和二年某月)も同様、一人てぼつぼつ取壊してゐたが、十二時頃、突然大音響と共に、其の土藏が崩壊して、同人とそれを見物に來てゐた附近の子供橋本はま(一〇)ちよび背負つてゐた吉田さみ(三歳)が其の下敷となり、重傷を負つたのを、附近の人々が駆けつけてやう／＼掘り出し、妻沼町の小沼醫院で手當中であるが其の土藏からは、鼠一疋も出なかつた。」

といふ記事が載つてゐました。しかも其の見出しには、

「慾深爺の失敗。あれも一つ土藏から珍品を掘り出さうとして生埋め」

といふ初號活字の文句が嘲ふやうに掲げてありました。(二、九、二五)